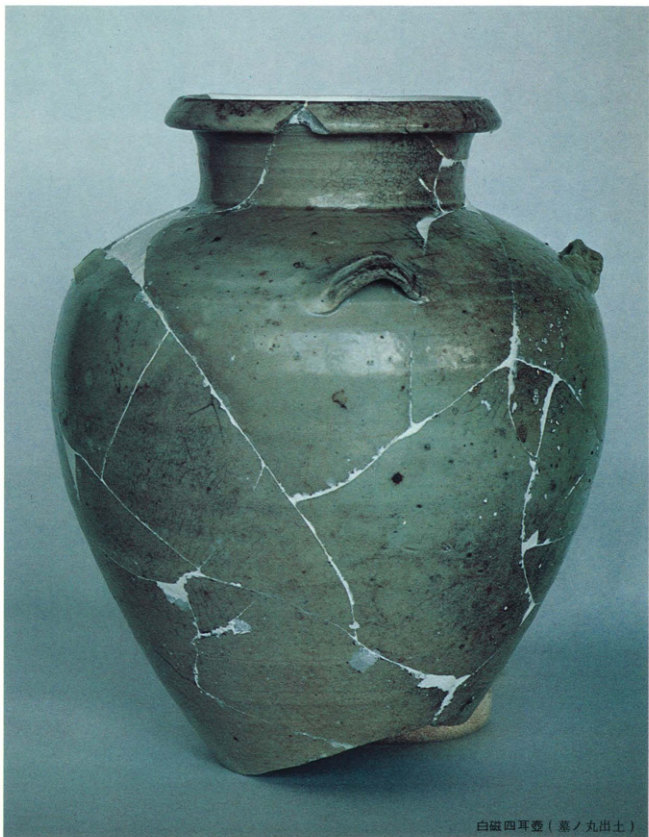


尾ノ背寺跡発掘調査概要(I)

—— 仲南町所在の中世山岳寺院跡の調査 ——

1980年3月

仲南町教育委員会



白磁四耳壺（墓ノ丸出土）

序

私が少年時代に「尾野瀬ほんには、昔大きなお寺があったが、土佐の長曾我部に焼かれてしもたんや」と誰れから聞いたともなく耳にしています、莫然とではあるが、心の中にそんなお寺を想像していました。

一昨年、町が実施している尾野瀬山開発で、林道工事に従事していた小泉建設の増田三千歳氏が上中から掘り出した壺を、県教育委員会文化行政課の松本豊胤先生が、貴重なものだと云うことで、鑑定の結果、鎌倉時代に宋より渡来した「白磁四耳壺」であることが判りました。これ迄に皿や瓦等の破片が地元の人々で発見されている点等から推定して、寺院があった事は、ほぼ間違いないと思われます。

このような事があって、松本先生のおすすめで、国の補助金を頂いて「尾ノ背寺跡」の発掘調査を昭和54年度事業として実施することになりました。

文化財遺跡の調査は、仲南町としては初めての事でした、技術も知識も全くないので、県文化行政課の御指導と、伊沢肇一、斉藤賢一両先生の熱意と御尽力によって、調査を無事終了致しました。

此処に調査結果を集録して、小冊子と致しました。関心を持たれる、各方面の方々に御活用頂ければ、幸甚に存じます。

最後になりましたが、本調査に御尽力下さった県教育委員会と、直接担当頂いた、松本・伊沢・斉藤、各先生に衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和55年3月

仲南町教育委員会教育長

山原義則

例 言

1. 本書は仲南町教育委員会が、昭和53年度におこなった緊急調査及び昭和54年度に国庫補助を受けておこなった尾ノ背寺跡発掘調査の概要である。
2. 調査は、香川県教育委員会文化行政課副主幹松本豊胤の指導のもと、同課職員伊沢肇一、斉藤賢一が担当した。
3. 本書の作成にあたって、実測図の整理・出土遺物の実測・写真・トレースなどは伊沢・斉藤が分担した。
なお、Ⅲ-2-(1)を伊沢が、Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ-1，Ⅲ-2-(2)，Ⅳを斉藤が分担執筆した。

目 次

序	
例 言	
I 位置と環境	1
II 調査の経過	1
III 発掘調査	4
1. 昭和53年度の調査	4
(1) 遺跡の概要	4
(2) 遺構について	4
(3) 遺物について	5
2. 昭和54年度の調査	10
(1) 遺構について	10
(2) 遺物について	23
IV ま と め	34
(付) 出土遺物観察表	39

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 …………… 2	第15図 SK003, 第2調査区
第2図 墓ノ丸石組み位置図 …………… 6	3層出土土器実測図 …………… 26
第3図 墓ノ丸石組み実測図 …………… 7	第16図 第2調査区2層・
第4図 墓ノ丸出土土器実測図 …………… 8	石垣下出土遺物実測図 …………… 27
第5図 袁神社出土四耳壺実測図 …………… 9	第17図 第2調査区・
第6図 第1調査区トレンチ配置図 …………… 10	神社横表採土器実測図 …………… 28
第7図 第1調査区石垣実測図 …………… 11	第18図 第2調査区谷表採遺物実測図 …………… 30
第8図 第1調査区遺構実測図 …………… 13	第19図 軒丸・軒平瓦拓影及実測図 …………… 31
第9図 第1調査区土層序 …………… 15	第20図 平瓦拓影及実測図 …………… 32
第10図 第2調査区トレンチ配置図 …………… 17	第21図 平瓦・丸瓦実測図 …………… 33
第11図 第2調査区遺構実測図 …………… 19	第22図 元豐通宝拓影 …………… 34
第12図 第2調査区石列実測図 …………… 21	第23図 糸切り土器拓影・実測図 …………… 35
第13図 第1調査区出土遺物実測図 …………… 23	第24図 尾ノ背寺跡地形測量図 …………… 37
第14図 SK001, SK002出土土器実測図 …… 25	

図 版 目 次

PL. 1(上)墓ノ丸石組み(東より)	PL. 8(上)第2調査区石垣(東より)
(下)墓ノ丸石組み(東より)	(下)第2調査区石垣(東より)
PL. 2(上)尾ノ背寺跡遠景(南西より)	PL. 9(上)第2調査区谷の石垣(北より)
(下)第1調査区Bトレンチ(北より)	(下)第2調査区発掘風景(北より)
PL. 3(上)第1調査区Cトレンチ(西より)	PL.10(上)墓ノ丸出土須恵器
(下)第1調査区Eトレンチ(南より)	(下)墓ノ丸須恵器出土状況
PL. 4(上)第1調査区Dトレンチ石組み(南より)	PL.11(上)三巴文軒丸瓦
(下)第1調査区遺物出土状況	(下)複弁八雲軒丸瓦
PL. 5(上)第2調査区トレンチ設定状況(西より)	PL.12(上)菊花均正唐草文軒平瓦
(下)第2調査区第1層除去後(西より)	(下)丸瓦
PL. 6(上)第2調査区SK001検出状況(西より)	PL.13(上)第2調査区出土遺物(土編, 火鉢の脚)
(下)第2調査区全景(西より)	(下)第2調査区出土遺物(鉄釘)
PL. 7(上)第1調査区石垣(東より)	PL.14 土師質土器
(下)第1調査区石垣(東より)	

I 位置と環境

香川県は四国の北東部に位置し、気候温和で、海上交通の要路である瀬戸内海に面していたこともあって、古来から文化の開けたところである。

尾ノ背寺跡のある仲南町は西讃に在って、海上交通の守護神として名高い金刀比羅宮を擁する琴平町の南に位置する。周囲を山に囲まれ、僅かに金倉川に沿って北に開けた盆地状地形に在る仲南町は、山の多い香川県にあって中でも平野の少ない山間の町である。しかし、古来から讃岐と阿波・上佐を結ぶ幹線がここを通り、今日も高知への国道が走る町でもある。

さて、遺跡の立地する尾野瀬山は仲南町の南部にあって、讃岐と阿波を隔てる阿讃山脈から北へ派出した一支脈に属し、標高577mを測る。この山は、體を西に流れる財田川に急峻な傾斜角をもってせり出しており、川に注ぐ沢山の谷を擁している。

この山からは、眼下の満濃池のほか讃岐富士で知られる飯野山が丸亀平野に浮かぶ姿や、瀬戸の島々、さらには古備の国までも眺めることができる。

一方これを地学的に見ると、阿讃山脈は和泉層群に属しており、これより派出する尾野瀬山も堆積岩の地層である泥岩層から成っている。したがって、尾野瀬山の近辺からは中世代白亜紀の化石が出上ることが知られている。しかし、それ以降の遺跡には乏しく、僅かに買田峠古墳が知られているにすぎない。

古代から文化の香り高かった讃岐国に在っても阿讃山脈に閉ざされた仲南の地は、中世になってやっと遺跡もところどころに見られるようになる。山脇村の山脇城、本日村の本目城、新目村の新目城などの山城や、法然堂、法照寺、圓宗寺等の寺院も文献に見える。⁽¹⁾

II 調査の経過

仲南町大字七箇字に尾を地番とする標高577mの山は、地元の人々には「尾ノ瀬はん」として親しまれている。現在、ここには久保地区等の氏神を祭る尾野瀬神社が営まれている。明治の頃には相撲大会も開かれて、沿道には参拝者の列が続く賑わいをみせた神社の祭礼も、今ではすっかり昔の面影を失っている。しかし、周辺の人々からは今も雨乞いの神様として深い信仰を集めている。その神社の境内には、近・現代の瓦や陶磁器に混って古い瓦や輸入磁器が表採されることが知られていた。

かってここに寺院が建立されていたことは文献にも見え、⁽²⁾地元研究者の間では表面採集される遺物やテラス状地形・石垣等の遺構によって周知されていた。しかし、その資料の限界から寺院の性格・規模を把握するまでには至っていなかった。



第1図 遺跡位置図

昭和53年8月、送電線用鉄塔の建設工事が尾野瀬山の通称「墓ノ丸」でおこなわれた際、石積みの中から白磁片が発見された。報告を受けた地元仲南町教育委員会と県教育委員会では、早速現場の保存をはかるとともに文化庁へ報告し、同年9月15日～9月23日まで緊急調査をおこなった。調査は白磁片の発見された石積みを中心におこない、残り破片や若干の須恵器片・土師質土器片を得た。さらに、石積みの規模・構造を明らかにするとともに、これが尾ノ背寺にかかわる遺構であることを明らかにした。しかし、この調査によっても尾ノ背寺の規模・性格はなお明確ではなかったため、これを明らかにし、史跡として保存するためにさらに調査をおこなうことになった。

昭和54年度の調査は、仲南町教育委員会が主体となり、県教育委員会の援助のもとに国庫補助を受け、同年10月8日から11月8日までおこなった。遺跡の範囲を明確にするために、調査の重点を遺跡推定地域の地形測量と遺構の検出に置いた。調査区は、尾ノ瀬神社境内東斜面に点在する平坦地を選び、第1調査区と第2調査区を設定した。(第23図)斜面に築かれた平坦地は長年の土砂流と戦後間もなくおこなわれた杉・檜の植林によって著しく攪乱を受けていた。このため、遺物の出土状況は悪く、遺構の検出も困難を極めた。こうした条件のもとで、第1調査区からは建物礎石と石列が、また第2調査区からは石列が検出された。

註1) 「全叢史」P391

註2) 鎌倉時代の僧道範の著した『南海流浪記』宝治2年11月17日の項に、

尾ノ背寺参詣。此ノ寺ハ大師善通寺建立之時ノ山山云々。本堂三間四面、
木仏御作ノ業師也。三間の御影堂、御影并ニ七祖又天台大師ノ影有レ之。

とある。(「香川叢書」巻一)

また、江戸時代に書かれた『古老伝旧記』には次のようである。

尾野瀬寺之事

讃州那珂郡東七カ村之内、本日村上之山

如意山 金勝院 尾野瀬寺 右寺領 新目村 本日村

一、本堂 七間四面 一、講堂数々 一、仁王門 一、鐘樓堂 一、寺跡数々 一、南之尾立に墓所数々有 一、呑水之由名水二カ所有
右尾野瀬寺は日浦に有、是は山脇分、其後本日村之内分後と云所に寺有之由、両所共に旧跡有之也。(「新編香川叢書」史料編一)

Ⅲ 発掘調査

1. 昭和53年度の調査

(1) 遺跡の概要

昭和53年度の調査は、送電線用鉄塔建設工事に伴う緊急調査としておこなった。尾ノ背寺本堂跡に推定される尾野瀬神社境内は、標高577mを測る山頂部から約60m程下った東斜面に在る。「墓ノ丸」はここから、さらに40m程下った北東に延びる尾根上に在って標高480mを測る。雑木を伐開した約600㎡の範囲には、河原石を用いた六基の石積みが確認される。(第2図)白磁片の出土した石積みは尾根の主軸線上に在り、なかでも比較的保存状態が良好で、規模も最大と思われるものであった。

(2) 遺構について

伐開されたところで確認された六基の石積みの形態は多様で、ほぼ円形を呈するものや方形を呈するものなどがある。またその規模も一様ではなく、径2.5m～5mを測る。しかし現状では、石積みの高さはともに低く、およそ20～50cmを測る。石積みを用いられている石材は、一部の泥岩を除くと、ともに扁平な砂岩であり、角がとれて丸みを帯びていることから巖を流れる財田川の河原から運ばれてきたものと思われる。大きさは径10～30cmを標準とするが、中には径50cmに達する大きなものも用いられていた。形はすべて偏平で、厚さはほぼ10cmを標準とする。また、重量の平均はおおよそ2kgを測る。

今回調査をおこなった石積みは、尾根のほぼ中央部に位置し、やや北の斜面に重心が寄った感を呈する。周りの石積みと較べるとやや大きめで、径約5mを測る。石積み基底周縁部では大き目の石が用いられ、直線を意図して四辺を構成するように並べられていたが、積み上げられた石全体としての規則性は認められなかった。その原因としては、本来規則性がなかったとする考えのほか、後世の盗掘もしくは木の根による攪乱が考えられる。積み上げられた形態そのものが低く、崩壊した感を受けることから推定すると、後者の可能性が強いように思われる。石積みの下はすぐ地山面であった。第3図の断面からもわかるように、地山は尾根筋から少し北寄りのところで比高差約1.5mの段を形成しており、石はこの段に沿って積み上げられたように重ねられていた。したがって、この段のところで石積みは最も高く、4～5段を数える。そして、周縁部に向かうに従って1～2段に減じて低くなっている。全体として石積みには厚みはなく、押し潰された感を呈す。

地山面に掘り込まれた遺構は検出されなかった。したがって、白磁四耳壺をはじめとする遺物の埋置遺構は石積み中にあることが想定されるが、調査前の工事によって壊されていて検出できなかった。

遺物はすべて石積みの中央部分から出土した。発掘の契機となった白磁四耳壺(第5図1)は

工事中偶然出土したもので、その後神南町の予備調査により出土したもので、そして本調査で出土したものの破片を接合したものである。ともに石積み下部の混乱土層から出土しており、攪乱のあとを示している。本調査で出土した遺物には白磁四耳壺のほか、第5図に掲げた須恵器と若干の土師質土器片が出土している。これら遺物の出土状況も、この石積みが自然又は人為的攪乱を受けたことを示している。周りの石積みについても、今回調査した石積みと同様の状況を示していることから類推すると、同様の攪乱を受けていることが考えられる。

(3) 遺物について

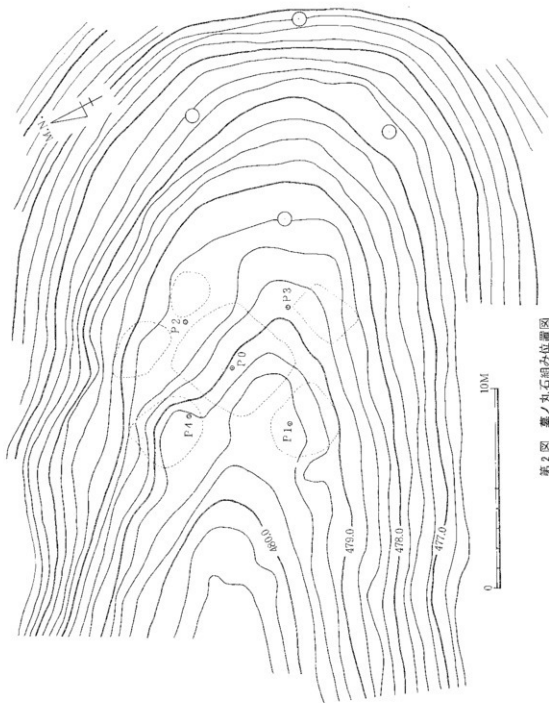
今回の調査により出土した遺物の中で特に注目されるのが白磁四耳壺⁽³⁾である。残念ながら底部を欠損しているが、高さはほぼ25cmを測るものと推定される。口縁部径は約10cmを測る。内面には体部下端より肩部にかけてやや深めの螺旋状のロクロ目調整が施されているほか、頸部下端近くに一条の沈線が認められる。外面にも内面同様の位置にロクロ目調整の跡が見られるが、内面に較べると浅い。肩部にはほぼ四等分された間隔で手捍ねの耳がつけられている。そのうち1個は欠損している。内外壁ともに灰緑色の釉がかけられているが、内壁の一部にはかかっていないところも見られる。やや外反気味に立ち上った頸部、口縁部のひねり返し、肩の張り具合等の形態の特徴は、保元元年(1156)の経筒を伴出した松山市石手町経塚出土の白磁四耳壺⁽⁴⁾に通ずるものがあり、12世紀の年代を設定することができるものと思われる。

四耳壺に伴った須恵器は第5図2～5である。2は口縁部がやや厚ぼったい「く」の字状を呈する壺である。肩の張りはあまり見られず、胴部から底部にかけて単調に落ちるものと推定される。体部内外面ともに丁寧なヨコナデ調整が観察される。内面は特にナデの跡が明瞭に見られる。底部は欠損しているが、3もしくは5タイプのものに接合できるものと思われる。

3は壺もしくは壺の底部である。内面には横ナデの痕跡が顕著である。外面にもナデ調整が観察されるが、底部付近にはヘラ状工具による横方向の削り調整がなされている。底部には不定方向のナデ調整の痕跡が見られる。焼成はやや軟質で、底部は瓦質に近い焼きとなっている。

4は片口壺である。成形後指先で押さえて注口を造り出している。体部内外面ともに横ナデ調整がおこなわれているが、内面下半にはヨコナデ工具の跡と思われる調整痕が観察される。また、外面下半にも不定方向のナデ調整が見られる。5は底部である。比較的直線的な立ち上がりを見せており、体部の張りがあまり見られない。体部内面には横ナデ調整がおこなわれている。体部外面は横ナデ調整がおこなわれた後、ヘラによる上から下方への縦方向の削り調整がおこなわれており、横ナデの痕跡は底部付近に認められるに過ぎない。この横ナデ後の削り調整は全体としてナデに近いが、特に体部上半にいくに従ってその傾向が強い。6は土師質土器である。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。外面の底部と体部下端に指頭正痕が見られるほかは横ナデ調整がおこなわれあいる。

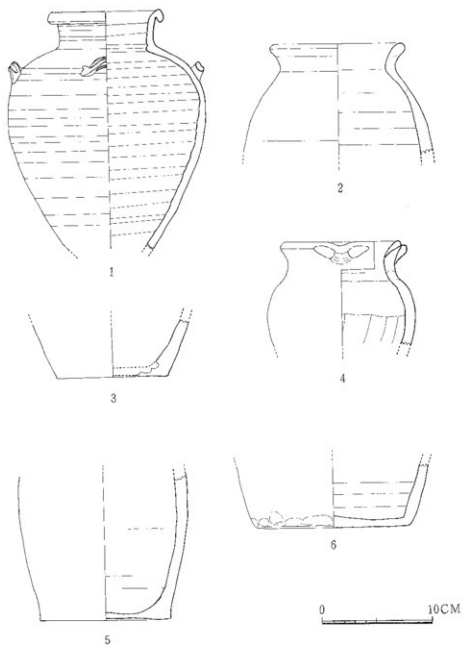
墓ノ丸から出土した須恵器は、平安時代以降の様相を呈しているが、2と4は泉下に類例が見られず、はっきりとした時代比定はできない。



第2図 墓ノ丸石組み位置図



第3圖 墓ノ丸石組跡平面圖



第4図 墓ノ丸出土器実測図

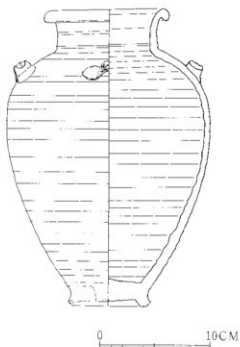
註③) 泉下に於ける白磁四耳壺の出土例は寒川町養神社出土のものに次いで2例目である。

養神社出土の四耳壺は現在寒川町教育委員会に保管されているが、寄贈者の秋友光雄氏が昭和25年頃自宅前の採土現場で発見したものである。採土業者が土取りをしていた折畳半分くらいの石を取り除いた翌朝口縁部が出ていたのを掘り出したとのことである。

この土取りに際して養神社から北へ延びる尾根上の古墳2基が壊されたらしい。四耳壺の出た地点は、この尾根の東端に位置し、南の養神社に向かう細い参道になっているところで、「庵の屋敷」という地名が残っている。近くには極楽庵寺跡があり、白磁の合子が出土したとの伝承がある。

養神社出土の四耳壺は高さは26.8 cm、口縁径11.4 cmを測り、灰緑色を帯びる釉が体部内外面から口縁部にかけて施されている。

註④) 『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館。



第5図 養神社出土四耳壺実測図

2. 昭和54年度の調査

(1) 遺 構

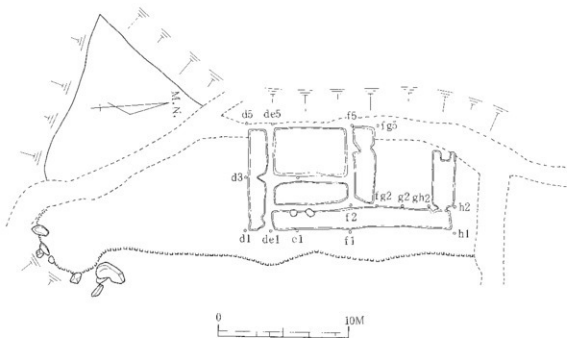
昭和53年度の「墓の丸」について、今年度（54年度）は、「墓の丸」の南側谷筋にある標高470 mを測る平坦地（第1調査区）と尾ノ瀬神社のすぐ下の標高520 mを測る平坦地（第2調査区）の2ヶ所を発掘調査した。両調査区とも植林した杉の木立が覆い調査は困難を窮めた。

第1調査区

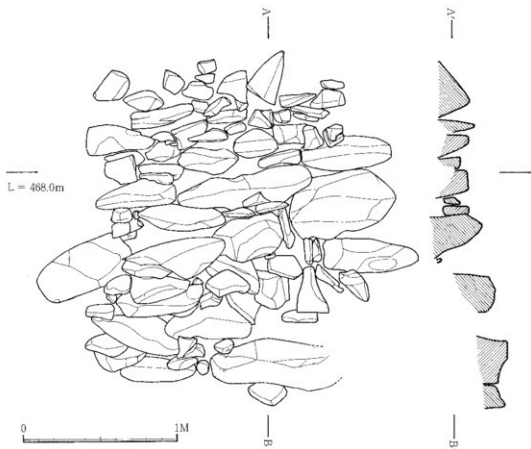
第1調査区は、尾ノ瀬神社から急峻な谷を下った平坦地に設定した。尾ノ瀬神社との最大比高差は約60mを測る。この平坦地は、南北長35m、東西幅10m、面積300㎡ある。調査を開始した時には森林総合利用促進事業の工事中であり第1調査区内の杉木立の間をブルドーザによって削平された幅2mの林道が走っていた。

平坦地の東側には石垣が約30mにわたって築かれており、高さ2.0～2.3 mを測る。石の積み方は、自然石（天石）を利用した乱層野面積みで80度～82度の法をもたせている。石垣上端部は所々崩れて亡失している、石垣築造の際簞地層と考えられる黄茶褐色土層を掘り込んで基底部分を構築し野面積みにしている隙間には砂岩の小塊を詰めている。石材は阿讃山脈を形成する和泉層群の砂岩、泥岩を利用しており、サイズは、長さ100cm、幅50cmの大型のものから、10cm～15cmの小振りな砂礫のものまで種々雑多である。

また、平坦地の南端付近には約10mにわたって、径1.5～2.0 m程ある砂岩の自然石がその



第6図 第1調査区トレンチ配置図



第7図 第1調査区石垣実測図

まま利用されており、石垣の役目をはたしている。

調査にあたっては、南北に14m×2m、6m×4m、東西に8m×2m、6m×2m、4m×2mのA～Fトレンチを設定し、都合約100㎡の範囲を試掘した。

a. 礎石

礎石は、平坦部は中央より合計9個検出した。桁行4間、梁行2間の規模をもつ礎石建物であることが判明した。側柱礎石間の心距離は、南北8.40m、東西3.90mを測り、柱間の平均距離は、南北2.10m、東西1.95mとなる。わずかであるが南北の礎石間心距離が長い、そして礎石の寸法は大きいもので60cm×60cm、小さいもので30cm×35cmのものを使用している。

礎石の石材は、尾ノ青山を形成する砂泥岩の自然転石の中で特に扁平なものを採用しており、礎石上面の造り出し工作は施されていない。

礎石の築成に際しては、地山直上に据えているが根石を入れて安定をはかっている。

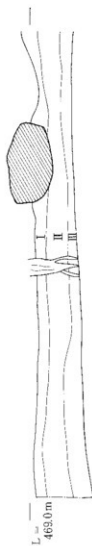
礎石の残存状態は良好であるが、当所は、杉や桧の植林が緩度となく行われている関係からか、礎石6個が欠損している。このことから、建造物は、E-6°-Sを正面にして建立してい



第8图 第1调查区遗址实测图



第9図 第1調査区土層序



- | | |
|-----------------|---------------|
| I 表土層 | N 暗灰色土層 (炭含む) |
| II 灰黑色土層 | V 明褐色土層 |
| III 灰色土層 (M層混入) | |

たと考えられる。

b. 石 列

礎石建造物の東側、側柱礎石から 0.7 m 東へ寄った位置に、礎石列に並んで高さ 15cm~20cm 長さ 6.50 m を測る 1 段の石列がある。

石列は、砂岩の不整形な自然石を使用しているが巧みに組み合わせ、外側の面を一直線に調整している。そして石列のほぼ中央部 1.8 m 間は、他より大型の石を頑丈に据え付け、両側端に比較的扁平な石を「仕切石」として横長に立てて築成している。他は、一辺約 20cm~30cm 程の小石を小石積にほぼ地山に築いたもので、石積の隙間や地山との隙間には、花崗土と粘土質の土を混合したと思われる土で丁寧に塗り込めている。列石は現状では一部破損欠落し点在的であるが、本来は一直線上に連絡してのびていたものと考えられる。

また、石列を境に、内側の礎石建造物が存在していた所は、外側に比べややレベルの高まりをみせている。

石列は、礎石建造物を取りまく土壇というより、境の仕切りとしての役目が考えられる。

c. 上 層 序

第 1 調査区において確認された土層層序は遺構内の堆積土を別にして基本的には 3 層認められる。

第 1 層は平均して河厚 10cm~15cm ほどである、樹根の多い腐植攪乱土層で暗灰黒色の色調を帯び多くの小礫を含む、第 2 層は厚さ 20cm~30cm、再三の植林による攪乱と、上砂流による攪乱を受けており若干の土師質土器が包含されている。色調は茶褐色を呈す。土質はバサバサし粘性が少ない。

第 3 層は、層厚 15cm~20cm、やや粘質のある黄茶褐色土であり、しまりがある。この層も樹根により若干攪乱を受けている。

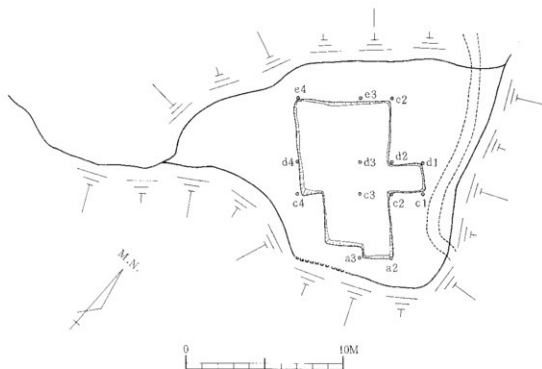
第 2 調査区

尾ノ瀬神社のすぐ下の谷筋に左右 2ヶ所の平坦地がある。1つは第 2 調査区に設定した個所であり、他は、神社本殿のすぐ下、標高 523 m、面積約 560 m² を測る平坦地で、地元では「相撲取り場」と称している。

第 2 調査区は、標高 517 m、尾ノ瀬神社（標高 530 m）との比高差 13m を測る。面積約 145 m² の平坦地に設定した。この調査区は、第 1 調査区に比べ面積は約半分と狭いが、尾ノ背寺木堂跡に比定されている尾ノ瀬神社境内に近く遺構の検出が期待された。

この平坦地には、杉木立や松が鬱蒼とし、枝打ちした枯木が狭い平坦地を埋めつくしている。その下から瓦片が多く表採できる。しかし、どの瓦片も永い年月の風化作用により摩耗が著しい。

平坦地の南東隅崖に石垣が幅 3 m、高さ 2.5 m 残存している。本来は、平坦地の崖線上をめぐっていたと考えられるが現在は、大部分が亡失している。現存する石垣は、上端のほぼ中央



第10図 第2調査区トレンチ配置図

部が凹形状になっており、排水溝の一部ではないかと思われたが確認はできなかった。

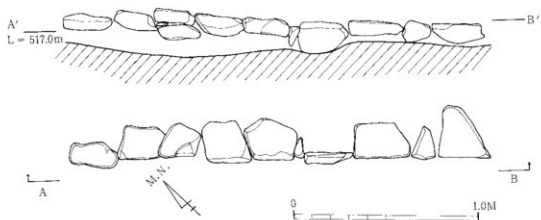
石垣は、第1調査区と同種の砂岩・泥岩の自然石を使用し、乱層野面積みの工法で構築している。その際整地層と考えられる明黄土色土層を掘り込んで基底部を構築している。石垣の基底部は著しく前方に迫り出しており、石垣全体をみると、基底部では偏平な石を丁寧に積み上げてはいるが、上端部は礫を乱雑に積み上げ、砂岩の小塊を全面につめている。

石垣から下方は、急斜面となって第1調査区のある谷へと連絡している。その急斜面にはコンタに添って石柱が数ヶ所築成されているのが認められる。いずれもかなりの部分流失しており遺存状況はよくない。かつて、尾ノ背寺本堂への道筋であったと伝承されている所であるだけに、本堂への階段でないかと期待がもたれたが、決定するには未だいたっていない。しかし、この斜面から、土砂にまじって多くの瓦片や、白磁片、青磁片、土師質土器などが表採できるので今後注目したいところである。

第2調査区の発掘調査にあたっては、平坦部に4m×2mのトレンチをA～F、縦横に設定し、精査した。その結果、略東西に並ぶ長さ2.3mの石列と、3つの土坑及びピットを検出した。



第11図 第2調査区遺構実測図



第12図 第2調査区石列実測図

a. 石 列

石列は、BトレンチとEトレンチにわたって確認された。この石列はN-46°W方向に並び、長さ2.3mあり、面を南西に向け南東から北西に走向し、さらに北西端から北東方向へ直角に折れ曲がっている。しかし、北東にのびる石列は2石を残して他は欠落している。石材と大きさについては、30cm×20cmから10cm×20cmの割合偏平な砂岩を配列している。この石列も、第1調査区で検出されたものと同じ小口積みの単列石列で、石列の内側が外側よりも若干レベルの高まりを見せている。

また、石列の西側には、土壇状遺構の高まりを見せている土層が観察できた。土壇状遺構部は、黄土色を呈した粘質土で、周辺部の有機物を含有した黒茶褐色土と明瞭な相異をみせているので土壇状高まりの外装遺構の検出をはかったが、痕跡を確認することはできなかった。また、土壇の外周にしばしばみられる雨落ち溝等の遺構は、調査区の拡大が困難なこともあって判明できなかった。土壇かどうかの判定は慎重な検討を要するが、少なくとも尾ノ瀬寺がかって存在し、当平坦地に寺院関連の施設が所在していたと推定できる。

b. 土 壇

土壇は第2調査区より4ヶ所確認された、土壇中には、焦土、木炭、石、土器片、平瓦片などが投げ込まれている。どの土壇も不整形で土壇間の位置関係や掘り方など規則性は見られなかった。

SK001土壇

Aトレンチの北東隅に位置し、黄茶褐色土から掘り込んでいる。トレンチのすぐ外側に山道があり発掘範囲の拡大が困難であったので全体を確認するに至らなかったが北東方向へさらに

広がりをみせる。

上塚の埋土中より、人頭大の砂岩、瓦片、土師質土器の出土をみた。遺物は土坑の中で一番多く検出した。また、土塚の北東隅から赤褐色を呈した焦土と木炭を検出した。

SK002 土塚

Cトレンチの北西隅に位置し、長径1.25m最深部35cmの瓢箪形の土塚で、土塚堆積土は灰黒色の粘質土である。土塚内の40cm×30cmの砂岩の下より、平瓦片、土師質土器（かわらけ）が出土した。さらに、焦土と少量の木炭を包含した茶褐色土が埋土中に混入しているのが観察できた。

SK003 土塚

Dトレンチの東よりに位置し、長径1.25m、短径0.75m、深さ20cm程の浅い不整形土塚で、整地上を掘り込んでいる。土塚堆積土は灰黒色土でやや粘質性がある。多くの礫とともに、土師質土器や平瓦片、釘が検出された。

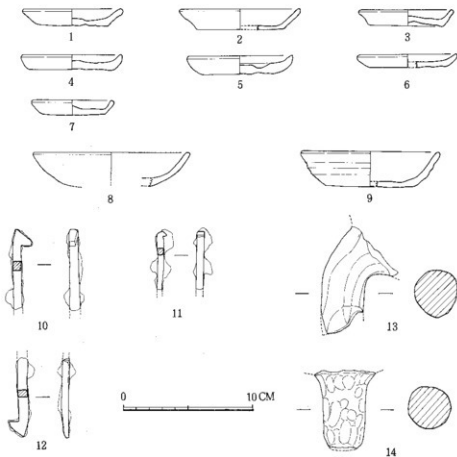
(2) 遺物について

出土状況

第1調査区及び第2調査区に於ける上層序は比較的単調なものであったが、各土層に含まれる遺物には混乱が見られた。このことは、尾野瀬神社東麓斜面一帯の表土層に古瓦や輸入磁器あるいは須恵器土師質土器の破片が見られることから明らかなように、上方からの土砂の流入に伴うものである。尾野瀬山一帯の土質は主に泥岩風化土層で、流水に浸蝕されやすく、遺物が混入しやすい性質をもっている。

第1調査区における遺物の出土量は第2調査区に較べると、第1層から地山直上面まで平均して少ない。このことは遺物分布の中心が第1調査区近辺ではなく、むしろ第2調査区近辺であることを示している。すなわち、この分布状態から、遺跡の中心は現在尾野瀬神社が建立されている標高約530mの平坦地であろう推定に確証を与えることができる。

第2調査区では表面に径30~50cm大の砂礫が散乱していたが、遺構に伴うものではなく、各



第13図 1区出土遺物実測図

上層に含まれる遺物にも混乱がみられた。しかし、数量的には第1調査区に較べ圧倒的に多く出土した。特に遺構面で検出された遺物の比率が高かった。各トレンチから検出された土壌SK001~SK004に包含された遺物には、土師質土器・瓦質土器・瓦片がある。第2調査区ではこの土壌のほかに平坦面東側の石垣下が目される。石垣下の堆積土中から比較的集中して土師質土器が出土した。残存度の良くない石垣ではあるが、残り部分中央には丁度排水口を設けた如くに窪みが認められ、ここから流出した状態で検出された。多くは細片化していたが、土師質の小皿・杯が中心であった。

第2調査区の東南側にある谷筋からも多数の遺物を表面採取した。落葉を取り除くと、瓦片・土師質土器片・磁器片などが多数散布しているのが認められる。日常雑器としての土師質小皿・杯・溝前焼の鉢・青磁や白磁の碗類が中心を占めていた。

尾野瀬神社付近からは瓦片が多数採集された。表面に沓の付着したものから磨耗したものまで、或いは比較的形態のつかみやすいものから小片まで多数が採集された。また、最近おこなわれた公園化のための工事に伴って削り取られた断面から瓦片が出土しているのが認められた。瓦の出土した層位は明確に区別できないが、深いところでは地表下約60~80cmまで混入しているのが認められる。

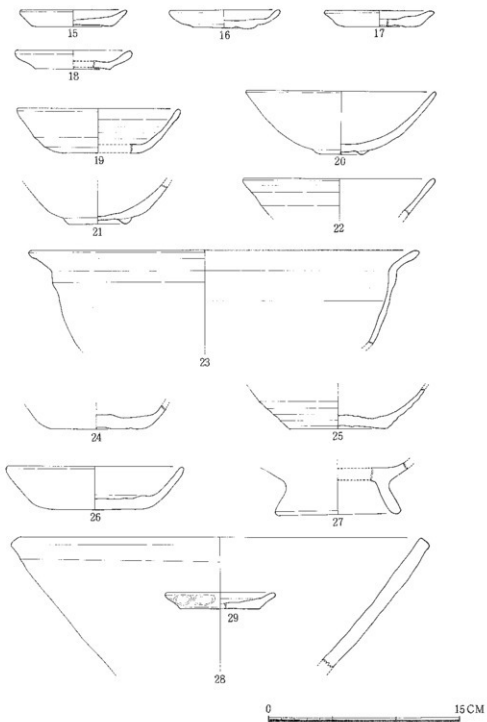
主な遺物

a. 土製品類

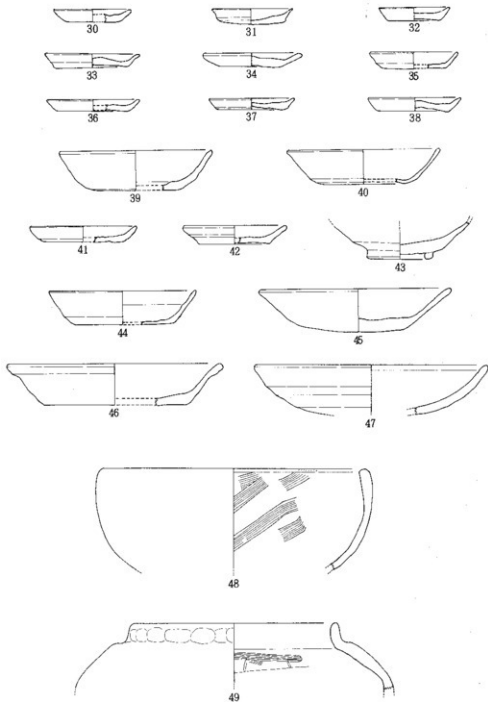
土器 土器には土師質土器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器があるが、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器は出土点数が少ない。土師質土器は第1層から遺構面まで平均して出土し、量的にも最も多い。器種には、皿・杯・碗・鍋・釜・すり鉢・壺などがある。陶器には、すり鉢・こね鉢・甕などがある。すり鉢には溝前焼のほかに土師質のものもある。こね鉢には瓦質のものもある。磁器は宋代の青磁が中心で、器種から見ると碗が主である。瓦質土器も少量ではあるが出土している。碗・こね鉢・杯などがある。

第1調査区 — 土師質小皿(1~4・6・7)・杯(9)・瓦質小皿(5)・須恵器杯(8)・土鍋脚が出土した。小皿の器高はいずれも1.5cm以下である。口径は6.5cm~9.5cmを測るものがある。いずれも底部はへら切り籬である。形態から分類すると、底部より口縁部にかけての立ち上がりやや外反気味のもの(1~3)、やや内傾気味のもの(4~7)に分類できる。杯のうち実測できた1点を図示したのが(9)である。体部に回転ナデの痕が明瞭に残っている。(8)は須恵器の杯で、やはり1点のみ出土した。体部に回転ナデによる調整がおこなわれている。(13)は土鍋の脚であるが、(14)は火鉢の脚と思われる。(13)はへら状工具によるナデ仕上げが施され、(14)には手捏ねを示す指痕が残っている。

第2調査区 — ここでは表採品のほかに遺構に伴う遺物も若干出土している。SK001・SK002・SK003の各土壌からの出土品である。中心は土師質の土器で、小皿・杯が多い。高台付の碗も若干見られる。

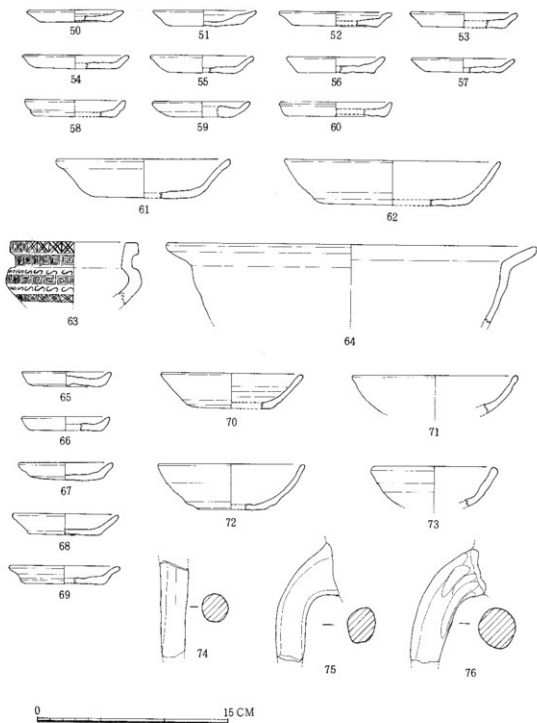


第14図 SK001. (15~23).SK002(24~29)出土土器実測図

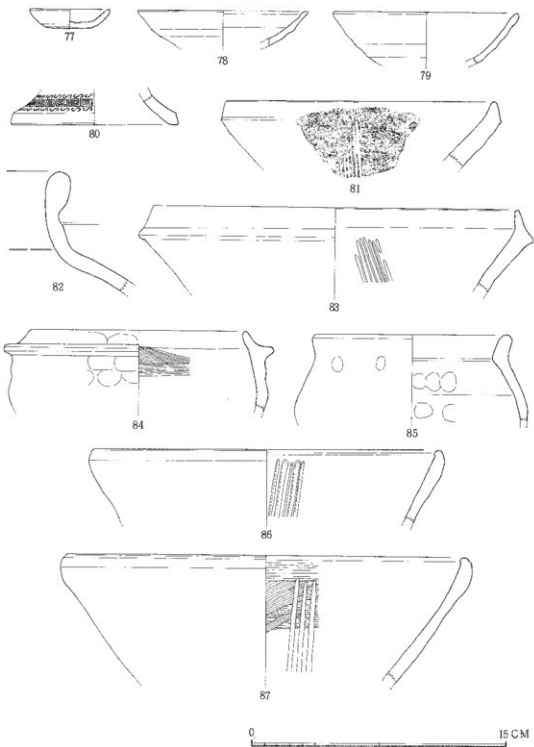


0 15CM

第15图 SK003(30~40)、2区3(41~49)层出土土器类测图



第16図 2区2層(50~64)・石垣下(65~76)出土遺物実測図



第17图 2区谷(77~83), 神社横表探(84~87)土器实测图

SK001 — 他の土埴よりも沢山の遺物が出土した。土師質小皿(15~18)は底部回転ヘラ切りである。全体として厚手で径もある。(19)は土師質坏である。内外面に回転ナデの跡が明瞭に残る。(20・21)は土師質碗である。磨耗著しく調整痕不明である。(22)は瓦質の碗と思われる。内外面に回転ナデ調整がおこなわれている。(23)は土師質の鍋で、比較的薄手である。

SK002 — ここから出土した土師質小皿(29)は外面に指頭圧痕をもつ特徴のあるものである。(24)~(26)は土師質の坏である。(25)は外面に回転ナデ調整の跡を残している。(27)は皿又は坏の高台と思われる。国府跡の調査では、平安末から鎌倉初頭に比定される層からこのタイプの高台付皿が出土しており、同タイプと思われる。今回の調査では1点のみ出土した。(28)は瓦質製品で、こね鉢と思われる。内外面に回転ナデの跡が見られる。

SK003 — 瓦片や小礫とともに土師質小皿(30)~(38)と土師質坏(39・40)が出土した。ともに底部回転ヘラ切りで、内外面ともに回転ナデ調整がおこなわれている。(39)は口縁端部内側に凹線状の窪みをもっている。(40)は器壁が極めて薄い特徴を有している。

第3層 — 第2調査区遺構面直上に位置づけられる。土師質小皿(41・42)、土師質碗(43)土師質坏(44~46)及び瓦質坏(40)が出土した。内外面ともに回転ナデ調整がおこなわれており、胎十・焼成の点でも遺構面上の遺物との時期差を見出すことはできない。(48)は土師質のこね鉢である。内面に刷毛目調整の跡が観察できる。(49)は土師質の短頸壺である。頸部外面に指頭圧痕がめぐっているほか、内面には刷毛目が観察される。

第2層 — 土師質小皿(50)~(60)が多数を占める。底部の厚さ・体部の立ち上がり等多様な形態のものがある。土師質坏には、器高に比べて口径の小さいもの(61)と大きいもの(62)の2つのタイプが出土した。いずれも回転ヘラ切り離しである。(63)は瓦質の脚台付壺である。第2調査区谷筋で表採した(80)と同一のものと思われる。(64)は土師質鍋である。

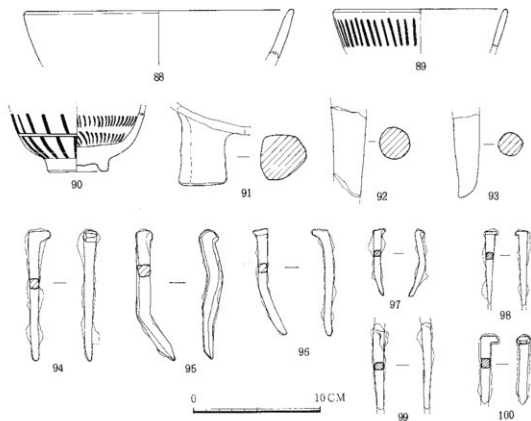
石垣下 — 土師質小皿(65)~(69)、土師質坏(70~72)、瓦質坏(73)、土鍋脚(74~76)などが出土した。土師質小皿は比較的口径の小さなものが多い。土師質坏・瓦質坏ともに回転ナデ調整・底部回転ヘラ切りである。

谷筋表採 — 土師質小皿(77)、土師質坏(78・79)、瓦質土器(80)、備前焼の播鉢(81・83)、壺(82)、土師質壺(85)、土師質羽釜(84)、青磁碗(88~90)、土師質火鉢脚(91)土鍋脚(92・93)など多様な器種が採取された。備前焼の福年から見ると、IV期のものと思われ⁽⁴⁾るが、他の遺物がこれらに伴うものかどうかはわからない。

神社橋表採 — 土師質播鉢(86・87)が採集された。

土製品 土製品は瓦のみで他の遺物は見られなかった。瓦も土器同様表面採集によるものが多かった。特に平瓦・丸瓦は尾野瀬神社周辺から多くを採集した。しかし、瓦全体の形態等を把握できるだけの大きな破片は少なく、小片が大多数を占めた。

軒丸瓦 榎弁八葉蓮華文(第19図の1)と三巴文(第19図の2)が出土した。1は第1調査



第18図 2区谷表採遺物実測図

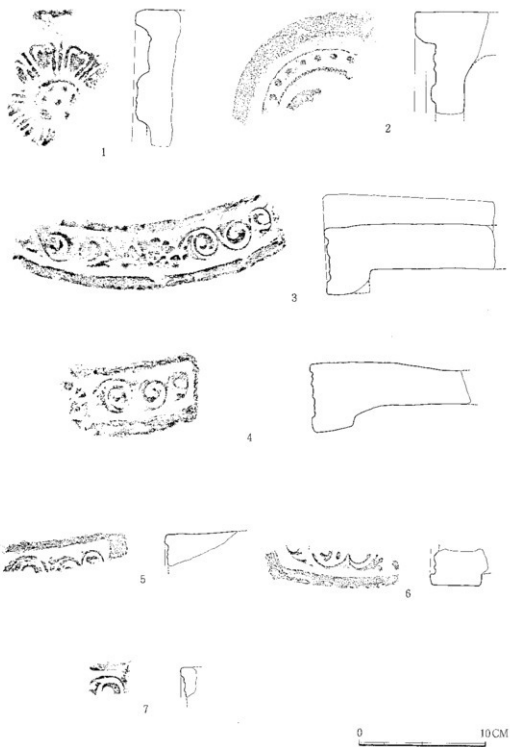
区3層より出土品である。中房の蓮子は7+1である。焼成は軟調で、淡黄茶色を呈す。径はおよそ14cmを測る。磨滅が著しく遺存状態は良くない。2は神社東側の谷筋第1層から出土したものである。周縁は直立縁で高く、内側で内斜面を呈している。外区に連珠文を飾っている。内区と外区を分ける線は、三巴文の尾が細長く延びてこれを兼ねているものと思われる。径は約16cmを測る。胎土には砂粒を多く含んでいるが、焼成は良好で堅緻である。暗灰色を呈す。

軒平瓦 焼成は多様なものが出土したが、文様は全て同一で菊花唐草文である。今回の調査期間中に採集された軒平瓦の破片は7点を数える。瓦当部分は、3・4を除き女瓦（モヤ）との接合部分で割れている。表採に負うところが大きである。段頸形式と思われる。

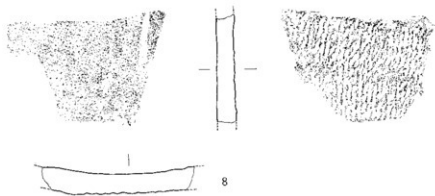
丸瓦 玉縁付のものが多く見られるが、行基葺式のものは見られない。表採に負うところ大である。

平瓦 小片が多く、全体的な形を把握することが容易ではない。形能・胎土・焼成から数タイプに分類できると思われる。

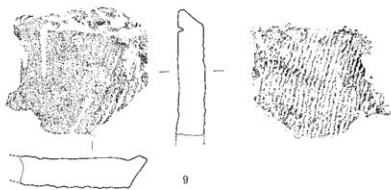
瓦を形能・胎土・焼成などにより分類すると、胎土・焼成から、砂粒を含まないが焼成がやや軟調で黒灰色～淡灰色を呈するもの（A類）、胎上に砂粒をあまり含まず焼成が軟調であり



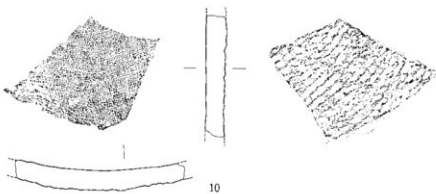
第19图 軒丸・軒平瓦拓影及实测图



8



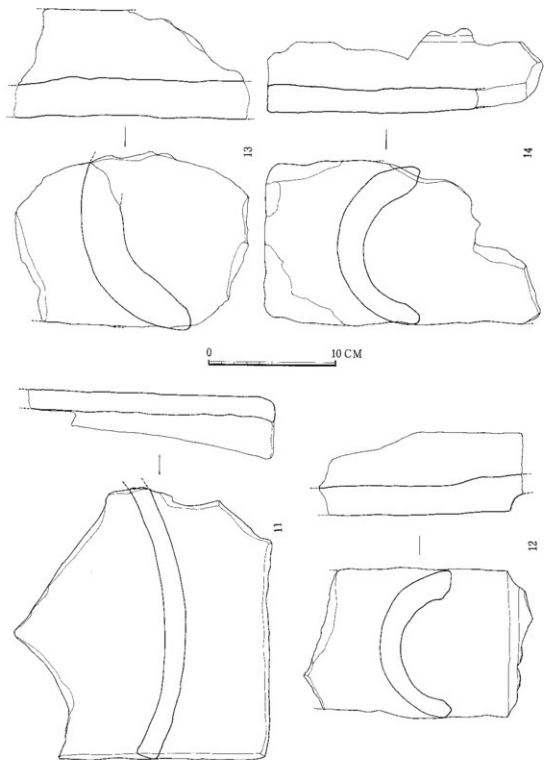
9



10

0 10 CM

第20圖 平瓦拓影及実測圖



第21图 平瓦・丸瓦実測図

淡黄褐色を呈するもの（B類）、砂粒を多く含むが焼成は良好で堅緻なもの、暗灰色を呈す（C類）に分類できる。また、調整の技法からは、凹面に布目を有し凸面に縄目の叩き痕があるもの（I類）、凹面に布目があるが凸面に叩き痕のないもの（II類）、凹面に布目がなく凸面にも叩き痕のないもの（III類）と3種に分類できる。3・4・7はA類、5はB類、6はC類に分類できる。平瓦のうち、A類、B類は今回の調査では出土していない。丸瓦についても同様である。11はIII類、12・13・14はII類に属する。A・B・C類とI・II・III類との関係は第1表の如くなる。

b. 金属製品類

鉄釘 第1調査区で出土した鉄釘（10～12）はいづれも破損したものであるが、折曲頭式のものと思われる。第2調査区から出土した鉄釘は大（94・95）中（96・99・100）小（97・98）の3種に分かれる。いづれも折曲頭式のものである。

銅錢 谷筋から1点のみが表採された。（第22図）初鑄年1078年の元豊通宝である。

第 1 表

瓦	分類	胎土・焼成			調整痕		
		A	B	C	I	II	III
軒丸瓦	複弁八葉		○				
	三巴文			○			
軒平瓦	菊花均正文 唐卓文	○	○	○			○
丸瓦				○			○
平瓦				○	○	○	○



第22図 元豊通宝拓影

IV ま と め

昭和53年度におこなった尾ノ丸の調査が契機となり、尾ノ背寺跡の調査が本格的におこなわれることになった。とは言え、推定される寺域の広さに較べた調査面積の狭さ、遺構に伴う遺物の乏しさ等から、寺域の確定や寺院の規模・性格等を限定することは極めて困難である。そこで、ここでは今回の調査によって明らかになった数点の事項について述べてみたい。

先ず、尾ノ背寺の創建年代・廃寺となった時期については、今回の調査でも残念ながらこれを明確にする遺構の検出あるいは遺物の出土を見ることはできなかった。しかし、遺物の大半が示すところによれば、寺の存続期間は鎌倉時代初頭から室町時代に至る間と推定される。その中心が現尾野瀬神社境内内であることは、瓦片がここに集中して出土することからも明らかである。54年度の第1調査区で検出された建物礎石の尾ノ背寺における位置づけはなお明確ではないが、第2調査区の石列・石垣とも合わせて、尾ノ背寺の一画に位置することは間違いないと思われる。さらに、第2調査区南東に広がる谷筋に点在している石垣は、ほとんど壊れかかっているとはいえ数段の平坦地を形成していたことを示している。建物遺構の可能性も十分考

えられる。また、神社すぐ下の通称「相撲取場」と呼ばれる平坦地にも注目しなければならない。平坦而東端の石垣の残存度は良くないが、平坦面としての残存状態は良好で、礎石様の石が点在する。ここでも遺構の検出が期待される。そして、今後最も注目しなければならないのが神社が建てられている平坦地であろう。その面積の広さ、周辺から瓦片が集中して出上ること。神社裏には礎石様の石が並んでいること等は、本堂跡としての可能性を十分に残している。

このように、現在尾野瀬神社の在る平坦地から、今回の調査地を含めて墓ノ丸までの一帯には平坦地や石垣が多数検出される。この範囲が尾ノ背寺の寺域に該当すると考えられるが、神社からさらに上方にも若干の平坦地があり、「鐘撞堂」などの地面が残っていることから今後検討されなければならないのであろう。

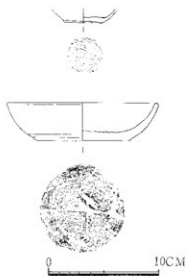
次に出土遺物の問題がある。今回の調査で出土した遺物の中心は七師質の小皿・環である。底部の切り離しは回転ヘラ切りが大半を占めているが、小皿・環に各1点づつ糸切りのものが見られる。(第23図)この違いは、ヘラ切りの中に左回転ヘラ切りが大半を占めているが、小皿・環に各1点づつ糸切りのものが見られる。(第23図)この違いは、ヘラ切りの中に左回転のものが稀に見られることは異なる意味をもっていると考えられる。すなわち、糸切りの製品は、在地のものではなく、讃岐以外の地から持ち込まれたものとするのがその数量から言っても妥当であろう。⁽⁵⁾

今回の調査では、仏具の出土が見られず、寺の性的性格についても明らかにすることができなかった。

このように、尾ノ背寺自体についてもまだ多くの問題点が残されているが、今後の課題としては、麓の集落あるいは普通寺との関係についても明らかにしてゆくことが必要であろう。讃岐における中世寺院(それも山所寺院と呼ばれるような)の研究は緒についたばかりである。今後より多くの調査がおこなわれるであろうが、中央大寺との関係はもとより、地方に於ける寺院の役割りを解明することも忘れてはならない事項である。

こうした観点から、今後さらに尾ノ背寺の発掘調査がおこなわれ、その実体が明らかになることを期待したい。

註5) 現在までに県下で確認されている糸切り技法の製品は、54年度に行われた国府跡の調査を含めて数点を数えるにすぎない。摂河泉地域史研究会、『摂河泉文化資料』第19・20号 摂河泉文庫 1980.3



第23図 糸切り土器拓影・実測図



第24図 尾ノ背寺跡。地形測量図

昭和53年度 基ノ丸調査区

器種	標図番号	法量 (cm)	形態, 成形手法等の特徴	色調	
磁器	白磁 四耳壺	1	径 9.6 高	体部内外面に粘土ヒモの継ぎ目痕が明瞭。肩部に四つの耳。頸部内面下端に沈線。	灰緑色
	壺	2	径 11.2 高	焼成良好堅緻。胎土精良で砂粒をほとんど含まない。体部内外面ともに丁寧なヨコナデ。	淡青灰色～淡灰色
陶器	"	3	底径 高	体部内面ヨコナデ、外面上半ナデ、底部付近横方向のヘラ削り、底部ナデ調整。焼成やや軟質底部は瓦質に近い。1～2mmの砂粒をごく少量含む。	淡灰色～灰色須恵器
	"	4	径 10.2 高	指で押さえて片口とする。焼成やや不良、体部はやや軟質、砂粒をほとんど含まない。体部内外面ともナデ(ヨコナデ)調整。	灰色
	"	5	底径 12.0 高	体部外面にヘラによるナデ様の削り、タテ方向。体部内面ヨコナデ。焼成良好堅緻1～2mm大の砂粒を少量含む。	灰色

昭和54年度 第1調査区

器種	標図番号	法量 (cm)	形態, 成形手法等の特徴	色調	
土師 質 上 器	小皿	1	径 7.8 高 1.4	底部回転ヘラ切り。左回転。 微砂粒を含む。 磨耗著しく調整痕不明瞭。	白黄茶色
	小皿	2	径 9.6 高 1.6	底部回転ヘラ切り。 体部内外面ともに回転ナデ調整。 精製土。	暗茶褐色
	小皿	3	径 7.6 高 1.3	体部回転ナデ調整。 底部回転ヘラ切り。	明茶色
	小皿	4	径 7.9 高 1.0	底部回転ヘラ切り。 体部内外面ともに回転ナデ調整。 微砂粒を含む。	赤茶色
	小皿	6	径 7.8 高 1.1	底部回転ヘラ切り。 体部回転ナデ調整。 精製土。	白黄土色
	小皿	7	径 6.4 高 1.2	底部回転ヘラ切り。左回転 微砂粒を含む。 焼成やや不良。	黄茶色
	杯	9	径 10.8 高 2.8	底部回転ヘラ切り。 体部回転ナデ調整？磨耗著しく調整痕不明瞭。	淡黄土色

器種	挿図番号	法量 (cm)	形態、成形手法等の特徴	色調
瓦質土器	小皿	5	径 10.2 高 1.5 底部回転ヘラ切り。 体部回転ナデ調整。 微砂粒を含む。	淡灰色
陶器	坏	8	径 9.8 高 須恵質。 まれに砂粒を含む。精製土。 焼成良好。堅緻。	淡灰色

第2調査区 A トレンチ

器種	挿図番号	法量 (cm)	形態、成形手法等の特徴	色調	
土師質土器	小皿	15	径 8.4 高 1.3 底部回転ヘラ切り。体部やや外反。 回転ナデ調整。	明黄白茶色	
	小皿	16	径 8.8 高 1.5 底部回転ヘラ切り。微砂粒を含む。 焼成普通。内外面とも回転ナデ調整。	黄上色	
	小皿	17	径 8.6 高 1.3 底部回転ヘラ切り。 体部内外面とも回転ナデ調整。	内淡黄上色 外赤黄茶色	
	小皿	18	径 9.2 高 1.4 底部回転ヘラ切り。体部内外面とも回転ナデ調整。 精製土。	明黄上色	
	坏	19	径 12.8 高 3.4 体部内外面とも回転ナデ調整。底部ヘラ切り。 微砂粒を含む。	灰白黄上色	
瓦質	椀	20	径 14.6 高 4.9 回転ヘラ切りの後付け高台。磨耗著しく調整痕不明。 焼成やや軟弱。まれに 0.5~2mm の砂粒。	淡黄上色	
	椀	21		精製土。焼成やや軟弱。	淡灰色
	椀	22	径 15.0 高	回転ナデ調整。微砂粒を少し含む。	淡灰色
土師質	鍋	23		精製土。体部内外面回転ナデ調整。 口縁部付近で外反し、指頭圧痕。	外茶褐色 内茶色

第2調査区 Cトレンチ

品 種	挿入番号	法 量 t/m	形態, 成形手法の特徴	色 調
土 質 土 器	坏	24	底部回転ヘラ切り。磨耗著しく調整痕不明瞭。	黄土色
	坏	25	底部回転ヘラ切り。 磨耗著しく調整痕不明瞭、微砂粒を含む。 体部内外面ともに回転ナデ調整。	白黄土色
	坏	26	径 13.9 高 3.4 底部回転ヘラ切り。 体部内外面ともに回転ナデ調整、微砂粒含む。 焼成普通。	淡黄土色 外面底部付近に黒斑
	脚付皿	27	脚高 2.6 体部内外面ともに回転ナデ調整。 微砂粒を多く含む。焼成良好。	淡黄茶色
	小皿	29	径 8.7 高 1.3 体部外面に指頭止痕。 底部回転ヘラ切り。	内黒褐色 外赤茶色
瓦 質 土 器	こね鉢	28	体部内外面ナデ調整。 焼成やや軟調。	灰黒色
土 質 土 器	小皿	30	径 6.1 高 1.0 微砂粒を多く含む。 磨耗著しく調整不明。	黄茶色
	小皿	31	径 6.4 高 1.3 微砂粒を少々含む。焼成良好。 底部回転ヘラ切り、回転ナデ調整。	茶褐色
	小皿	32	径 5.6 高 1.0 焼成普通。底部回転ヘラ切り。	黄土色
	小皿	33	径 7.5 高 1.2 底部回転ヘラ切り。	明茶色
	小皿	34	径 7.8 高 1.1 底部回転ヘラ切り。体部内面回転ナデ調整。 微砂粒を多く含む。	黒褐色
	小皿	35	径 7.0 高 1.3 底部回転ヘラ切り。 回転ナデ調整。	明黄茶色
	小皿	36	径 7.3 高 0.9 微砂粒を含む。 体部内外面とも回転ナデ調整。	淡黄灰色

器種	挿図番号	法量 t[m]	形態、成形手法等の特徴	色調
上 部 質 土 器	小皿	37	径 6.8 高 0.9 体部内外面とも回転ナデ調整。 底部回転ヘラ切り。	黄土色
	小皿	38	径 7.4 高 1.1 微砂粒（まれに 2～3mm）を多く含む。 底部回転ヘラ切り。	淡黄土色
	杯	39	径 12.0 高 3.1 砂粒を少々含む。 底部回転ヘラ切り。	黄土色
		40	径 12.0 高 2.7 底部回転ヘラ切り。 体部内外面とも回転ナデ調整。	淡黄色

3 層出土

器種	挿図番号	法量 t[m]	形態、成形手法等の特徴	色調
土 層 質	小皿	41	径 8.4 高 1.2 内底に指頭圧痕。 底部回転ヘラ切り。	茶褐色
	小皿	42	径 8.2 高 1.5 回転ナデ調整。 微砂粒を含む。底部回転ヘラ切り。	淡赤茶色
	椀	43	径 高 砂粒を含む。底部回転ヘラ切り。 後付け高台。	明黄茶色
	杯	44	径 11.6 高 2.7 砂粒を少々含む。 回転ナデ調整。	黄土色
	杯	45	径 14.6 高 3.4 体部内外面とも回転ナデ調整。 底部回転ヘラ切り。精製土。	淡黄上色
	杯	46	径 17.0 高 3.2 微砂粒を含む。 底部回転ヘラ切り。	明黄茶色
	こね鉢	48	径 高 内外面回転ナデ調整。内面にはその後刷毛目。 砂粒を含む。黒曜あり。	黄上色
壺	49	口縁径 微砂粒を多く含む。 頸部外面に指頭圧痕。	内黄茶色 外茶褐色	

器種	標図番号	法量 (cm)	形態、成形手法等の特徴	色調
瓦質土器	環	47	径 18.0 高 高 微砂粒を含む。 焼成普通。	灰白色 灰白黄土色

第2調査区2層

器種	標図番号	法量 (cm)	形態、成形手法等の特徴	色調
土 器	小皿	50	径 7.6 高 0.9 砂粒を少し含む。	淡黄茶色
	小皿	51	径 8.2 高 1.2 体部内外面とも回転ナデ調整。 底部回転ヘラ切り。	淡茶白色
	小皿	52	径 11.1 高 8.8 体部内外面、回転ナデ調整。 微砂粒を多く含む。底部回転ヘラ切り。	暗黄土色
	小皿	53	径 8.5 高 1.2 精製土まれに砂粒を含む。体部内外面回転ナデ。 焼成普通。底部回転ヘラ切り。	淡黄土色
	小皿	54	径 8.4 高 1.1 微砂粒を少量含む。	淡黄土色
	小皿	55	径 8.2 高 1.4 微砂粒を含む。精製土。 焼成普通。	淡白黄土色
	小皿	56	径 7.7 高 1.3 体部内外面回転ナデ調整、少量の微砂粒を含む精製土。底部回転ヘラ切りのち板目痕。	白黄土色
	小皿	57	径 8.2 高 1.1 底部回転ヘラ切り。焼成普通。 微砂粒を含む。	黄土色
	小皿	58	径 8.0 高 1.3 精製土まれに微砂粒を含む。 底部回転ヘラ切り。	黄土色
	小皿	59	径 7.6 高 1.3 底部回転ヘラ切り、精製土、焼成普通。	黄白色
小皿	60	径 8.8 高 1.1 精製土、底部回転ヘラ切り。 体部回転ナデ調整。	黄土色	

器種	検出番号	法量 (mm)	形態、成形手法等の特徴	色調
土師質土器	坏	61	径 13.6 高 3.1 微砂粒を含む。焼成普通。	淡黄土色
	坏	62	径 17.0 高 3.5 砂粒を含む。焼成普通。底部回転ヘラ切り。体部内外面ともに回転ナデ調整。	黄土色
	罎	64	径 28.8 高 0.5 mm程度の砂粒を含む。焼成普通。	暗褐色
瓦質土器	壺	63	三種押型文をめぐらしている。37と接合できると思われる。口縁端部から体部上半はヘラ磨き。体部内面下半はヨコナデ。精製七。	黒色～暗灰色

第2調査区石垣下

器種	検出番号	法量 (mm)	形態、成形手法等の特徴	色調
土師質土器	小皿	65	径 7.1 高 1.1 微砂粒を少々含む精製土。焼成良好。底部回転ヘラ切り。	黄茶色
	小皿	66	径 7.0 高 1.1 微砂粒を含む。焼成良好やや堅緻。	黄土色
	小皿	67	径 7.4 高 1.4 定部回転ヘラ切り。微砂粒を含む。焼成普通。体部内外面ともに回転ナデ調整。	淡白黄土色
	小皿	68	径 8.4 高 1.6 微砂粒を少し含む。焼成良好。底部回転ヘラ切り。体部回転ナデ調整。	淡茶色
	小皿	69	径 8.7 高 1.4 わずかに微砂粒を含む精製土。焼成普通。底部回転ヘラ切り。体部回転ナデ。	黄土色
	坏	70	径 11.2 高 2.7 精製土。焼成やや堅緻。底部回転ヘラ切り。褐色斑あり。体部回転ナデ調整。	黄土色
	坏	71	径 12.8 高 体部内外面ともに回転ナデ調整。微砂流を含む。焼成普通。	淡黄土色
	坏	72	径 11.6 高 3.5 体部内外面ともに回転ナデ。微砂粒を含む。焼成普通。	淡黄土色

器種	押図番号	法量 tml	形態、成形手法等の特徴	色調
土師質土器	土碗脚	74 / 76	微砂粒を含む。焼成良好。ナデ調整。 72ヘラによるナデ調整。	灰茶色 黄茶色
	碗	73	精製上。焼成良好。肉厚に重が多い。	黒褐色

2 区谷表採

器種	押図番号	法量 tml	形態、成形手法等の特徴	色調
土師質土器	小皿	77	径 6.4 高 1.5 内底に指頭圧痕。微砂粒を含む。 底部回転ヘラ切り。	内黒茶色 外茶色
	碗	78	径 高 回転ナデ調整。微砂粒を含む。 焼成良好。	黄土色
瓦質土器	坏	79	径 13.4 高 精製土。焼成普通。	灰色
	蓋 脚	80	口径13.4 精製土。焼成良好。 脚部外に3種の押型文。 58と接合できると考えられる。	黒色～暗灰色
陶器	擂鉢	81	径 20.8 高 体部内外面ともに回転ナデ調整。 カキ目は下から上へ、7本まで確認できる。 備前焼。	暗茶褐色
	擂鉢	83	径 31.0 高 体部外面に粗い回転ナデ。口縁部に丁寧なナデ。 体部内面に回転ナデ。 5mm程度の砂粒を多く含む。備前焼。	暗褐色～茶褐色
	蓋	82	径 高 体部内面に横ナデ。 刷毛目調整。備前焼。	茶褐色
土師質土器	羽釜	84	径 16.8 高 罎の下に指頭圧痕。体部内面に刷毛目。 微砂粒を多く含む。	暗茶色
	壺	85	径 15.0 高 体部内外面に指頭圧痕。 焼成良好。砂粒を含む。	茶褐色
	擂鉢	86	径 24.0 高 内面ナデのあとヘラ磨き、口縁部はヘラによるナデ。 カキ目は5本までが確認できる。 下から上へ(神社横表採)	黄褐色

器種	挿図番号	法量 (cm)	形態, 成形手法等の特徴	色調	
土師 土器	襷鉢	87	径 28.4 高	体部外面には皮状製品によるすり削し。口縁端部はナデ。体部内面は刷毛目のおとカキ目下半は調整痕不明(神社横表採)	淡黄茶色
	青磁鉢	88	径	焼成良好。堅緻。無文	素地白色 淡緑色釉
	青磁碗	89	径	焼成良好。堅緻。体部外面に。タテ方向のヘラ描きによる文様。	素地白色 淡緑色釉
青磁碗	90	径	焼成良好。堅緻。体部内外面にタテ方向のヘラ描き文様。	素地白色 淡緑色釉	
土師 土器	脚	91 ? 93	微砂粒を含む。 91火鉢の足。	黄茶色	

金属製品類

器種	挿図番号	法量 (cm)	形態, 成形手法等の特徴	色調
鉄釘	94 ? 100	長さ 5.0~10.0 太さ 0.5~1.0	折頭式。 94 長さ10.2cm, 太さ0.8cm。	

圖 版



墓ノ丸石組み（東より）



墓ノ丸石組み（東より）



尾ノ背寺跡遠景（南西より）



第1調査区B
トレンチ（北より）



第1調査区Cトレンチ（西より）



第1調査区Eトレンチ（南より）



第1調査区D
トレンチ石組み(南より)



第1調査区遺物出土状況



第2調査区トレンチ設定状況（西より）



第2調査区第1層除去後（西より）



第2調査区SK001検出状況(西より)



第2調査区全景(西より)



第1調査区
石垣（東より）



第1調査区石垣（東より）



第2調査区石垣（東より）



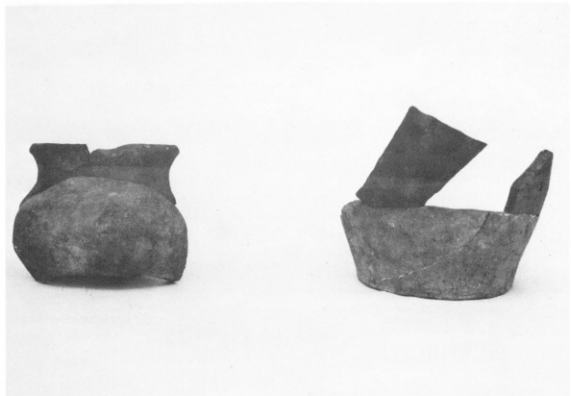
第2調査区石垣（東より）



第2調査区谷の石垣（北より）



第2調査区
発掘風景（北より）



墓ノ丸出土須恵器



墓ノ丸須恵器出土状況



三巴文軒丸瓦



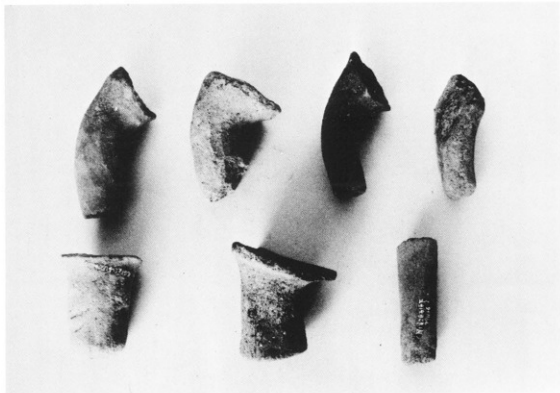
複井八葉軒丸瓦



菊花均正唐草文軒平瓦



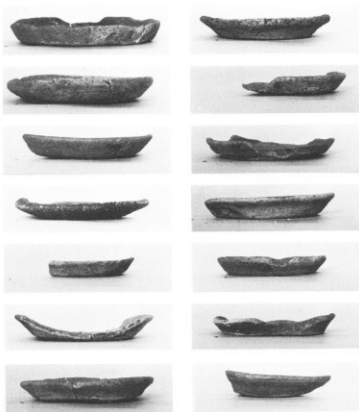
丸瓦



第2調査区出土遺物（土鍋，火鉢の脚）



第2調査区出土遺物（鉄釘）



土師質土器

尾ノ背寺跡発掘調査概要(I)

— 仲南町所在の中世山岳寺院跡の調査 —

1980年3月31日発行

編
集
行
発

仲南町教育委員会

香川県仲多度郡仲南町大字十郎字生間 415-5

TEL 08777-5-1131

印
刷

株式会社 美 巧 社
